

校長 だ よ り

～読書の効用～（「梅檀」第27号発刊に寄せて）

平成24年2月8日（水）

校長 與那覇 健 勇

デカルトはこう言っています。「良き書物を読むことは、過去の最も優れた人たちと会話を交わすようなものである」と。同じようなことを齋藤孝氏も「低リスクで優れた人物の教えに接し、しかも自分のペースで学べる方法は何かといえば、これはもう読書しかないだろう」と。氏はさらに、「自分の思考を定着させたり、掘り下げたりする作業は、一人の空間・時間でなければできないだろう。そういう場で自分自身と向き合いながら他者の話を聞くのが読書なのである」とも。また、小川洋子さんの『博士の本棚』にはこう書かれています。「いったん本を開けば、そこに目的などありません。ただもう無心で、ことばの海に身を委ねるだけです。ページの向こうに隠された未知の世界は私の抱える些細な事情などに関係なく歴然とそこに存在し、私を待ってくれます」・・・

私は本でも新聞でも読んだときに心が震えたフレーズをメモする習慣があります。上の引用はすべてそのような私のメモの中からの抜粋です。昨年是一年間に32冊の本を読みましたがその中からもう少し拾ってみましょう。

- 1月24日：人は知らず知らずのうちに、最良の人生を選択しながら生きている。（「JT A機内誌」から小山薫堂の父の言葉）
- 2月23日：素直な心とは、自らの至らなさを認め、そこから惜しまず努力する謙虚な姿勢のことです。（「生き方」稲盛和夫）
- 3月30日：本当に並はずれた人々など、この業界にはいません。並はずれた夢を見て、並はずれた業績に向けて、自分自身を律することができる普通の人々がいるだけです。自分ができることに没頭し、誰でもできることを、誰よりも熱心にやった結果、普通の人では到底手に入らなかった成功を手にすることができたのではないのでしょうか。（「自信のつくり方」青木仁志）
- 4月19日：私はこの人の世の中にあって、人を育て、人を救い、人を強くし、人をさらに興奮させ、人を作っていくのは人の情けー（それを私はいつも「愛」だというのだが）ーと思いながら生きてきた（「星野流」星野仙一）
- 5月6日：「カッコいい大人」の一つの判断基準は、夢を持ち、それに向かって努力を絶やさないうことだ。夢を抱いて突き進む大人や親の姿、振る舞いに子どもは憧れる。大人や親が憧れの対象でなければ子どもは志さえも立てられない。・・・「子どもの日」は大人が自分自身に問いかける日でもある。（「琉球新報」5/5付け金口木舌）
- 6月6日：ビジネスマンのいちばん大事な務めは愛されることである。愛されるような仕事をするのである。（「成功の金言365」松下幸之助）

ー「梅檀」第27号の発刊に際してご尽力された方々にお礼を申し上げます。素晴らしく仕上がりました。どうぞ中身を御覧になり命の息吹を感じ取ってください。ー